

## 研修報告書 No.21

所 属： 国立国際医療研究センター 初期臨床研修医  
氏 名： 魚本 真理  
研修先： 医療法人臼井会 田野病院

今回の 4 週間の高知県での地域医療研修は、私の医師人生にとって大変貴重な経験となった。以下に今回の研修を踏まえた考察を述べる。

### (1) 県外在住医師から見た高知の地域医療の現状

私の勤務している病院は東京都新宿区にある国立病院である。当院は、病床数 673 床、標榜科 43 科、約 340 人の常勤医師とその他多数の若手医師が勤務しており、大病院の一つである。一方、今回研修させていただいた田野病院は、病床数 84 床、標榜科 12 科、常勤医 6 人であった。このような私の立場から最も懸念されたのは、高知県安芸地域の医師不足であることは言うまでもない。

田野病院の常勤医は、月に数回の当直をこなし、1 人で 2 つ以上の診療科に渡る外来を担い、ときに病棟の半分以上の患者を 1 人で担当することもある。このような現状では、診療が手薄になることや、緊急対応が遅れるリスクが大きくことが十分に考えることができるため、少しでも改善されるべきである。

世の中の流れとしては、特に若手医師はスペシャルティを持つとする傾向にある。その中で専門医取得は必須であり、専門医取得が可能な病院や症例を多く積むことができる病院への勤務を希望する現状がある。この状況下で田野病院での若手医師増員を果たすためには、リハビリテーションの充実や総合診療が可能であることを強みとして、リハビリテーション専門医や総合診療専門医の取得機関を目指すべきである。なお、このためには院内に指導資格をもった上級医が必要であり、この資格を取得するためには、臨床経験年数のみならず、認定施設での 3 年間の勤務が必須であるという規則がある。しかし、医師不足の深刻化している地方病院に勤務する医師にとって、3 年間自分の病院を離れることはほとんど困難であり、指導資格を取得できない現状がある。

地方病院の医師に対する指導資格認定について、早急な条件緩和が必要であると思われる。

上記が難しい場合は、自発的な就労を期待するには限界があるゆえ、医局からの派遣医師の増員、大学入試の時点での地域枠を広げるといった方策が止むを得ないだろう。

### (2) 研修内容に対する意見

研修内容は大変充実したものであった。

私は4週間、院内の各部署にはじまり、外部の訪問看護ステーションや通所リハビリステーション、他の診療所やクリニックといった、田野病院周辺の医療を支える全ての施設を見て、学ぶことができた。各々の部署・施設の方は私を快く受け入れてくださり、一緒に患者さんのケアを行ったり体験したりすることができた。普段は病棟で、入院患者しか診ることがなかった私にとって、患者さんの退院後の生活における苦勞や、その後の回復期治療の重要性を認識できたのはとても貴重であった。訪問診療研修では、脳梗塞に対する治療後のある患者さんを訪ねたが、家庭でうまく料理ができず健康な食事というよりはカップラーメンやお菓子等といった添加物や脂質・糖質の多い食事に頼っていたりタバコの臭いがしたりと、梗塞のリスクとなるような生活習慣になっているのを知った。また、同患者さんがリハビリテーション施設にて、もう死にたい、薬を飲み続ける意味などない、といった訴えを聞くこともできた。こういった、退院後の現場での経験から、退院後の生活を診ることの重要性や、回復期治療を継続することの難しさを痛感することができた。

入院中の患者さんしか知らなかった私にとって、患者さんにとっては退院こそがスタート地点であると感じた。そして一人の患者さんをケアしている地域全体の協力体制を学ぶよい経験となった。

今後の高知県の研修においても、ぜひとも引き続き、病院内にとどまらず、病院外への施設での研修機会を与えていただけたら、幸いである。

### (3) 今回の臨床研修で得たもの

田野病院を中心とした医療施設では、医師はもちろん、看護師、リハビリテーター等のスタッフ一人ひとりが、よりよい治療を提供しようという姿勢をもっていただくことに感銘を受けた。看護師は日々のケアのみならず手術の助手や、外来の診療録の補佐をしていた。リハビリテーターはオーダーメイドのリハビリプランを考え、医師に提案していた。業務前後には各部署で勉強会が頻回に開催されていた。

同時に、スタッフの方々はとても温かい方々であった。患者さんに対してのみならずスタッフ間でも思いやりが溢れていた。なにより外部から来た私自身に対してもまるでチームの一員であるかのように接していただき、日々の研修のさらなるモチベーションとなった。

このように、スタッフ全員が、治療に対する積極性や人に対する思いやりにあふれていることは、田野病院・臼井会の歴史の中で養われてきたかけがえのない財産だろう。これらは一朝一夕で得られるものではないにせよ、自分が今後勤務していく病院でチーム作りをしていく上で、ぜひとも模範としていきたい。